

総評 詩 武重 知加子

本年度の応募はジュニアの部は減ったものの一般の部が増えていたのは良かった。

ジュニアの部の小学生の作品について、毎年言われることではあるが、題材が季節のもの（ひまわり 入道雲 かき氷 花火 海水浴）が多い。それで悪いわけではないのだが、その題材につきまとう月並みな表現から抜け出すことは難しい。そこに作者の存在を感じられない。どんな稚拙な表現であろうと、そこに生きている人の息づかいが感じられるものが心に届く。

中学生は例年「部活動 がんばろう」みたいな作品が多かったけれど今年バラエティーに富んでいた。抽象的な思考のものもあり、また、ファンタジーのような雰囲気作品もみられた。

高校生の作品は1編だけだった。力作ではあったが、気持ちを表す言葉にやはりオリジナリティがほしい。この涙の先の気持ちを讀みたかった気がする。

「きれいだな」「楽しいな」「悲しいな」から抜けだそう。喜怒哀楽の言葉から、はみでるもの、こぼれ落ちる感情を丁寧にすくい上げ、みつけていこう。難しいことかもしれないが、そこから、詩が始まると私は思う。

一般の部は例年通り 3人の審査員が選んだ作品を讀み直し協議した。上位の3作品は決まったけれど、1席と2席の作品は拮抗していて最後まで迷いつつ、「口紅」が選ばれた。

すべての審査を終え、初めて作者の名前を知ることになるのだが、帰宅してからわかった。昨年高校生として、1席をとった方が一般の部に今年応募して入賞されているのを。さすがである。それととても嬉しかった。

いまのジュニアの皆さんが、やがて大人になるまで作品を作り続けて、一般の部に作品を出してくださることを願いつつ、佐賀の文学が広がっていくことを思った。